

日本の木材輸入と東南アジアの森林伐採

浪岡高等学校
福士 寿一

I はじめに

古くから、森林は人間に木材を供給しつづけ、人間はそれを建造物、日常の道具、燃料として使用してきた。最近では紙パルプの需要も多い。また、土壌も供給してきたのである。森林が人間に与える恩恵は物質資源だけではない。気候をやわらげ、水源を養い、土壌を保全し洪水や山崩れを防ぎ、炭酸ガスを吸い酸素を供給して大気を浄化し、また、野生生物の保護や国民のレクリエーション機能など、人間生活の環境保全という環境資源としても重要である。森林の新たな効用として「森林浴」も登場し、森林が人間によい環境をもたらすという認識はさらに高まってきた。

しかし、人類の歴史は森林破壊の歴史の一面をももっている。古代文明の発祥地であるエジプトやメソポタミアも森林におおわれていたのである。地中海地方もかつて常緑広葉樹が茂っていたが、森林を焼き放牧をしてきたのでいまその面影がない。ローマ時代には、北西ヨーロッパは森の海であったが、農耕地の拡大と燃料、用材のための伐採によって減少していった。合衆国においても、開拓前線の西進と共に森林は減っていった。人間は、森林を伐採し草地を裸にし、農地の土壌浸食をすすめてきたのである。

いま、地球上の環境のなかで、森林の減少が最も重要な問題となっている。資料によると、西暦2,000年まで、森林の減少の多くは発展途上国において生じるであろうと予測しているし、1982年5月ケニアの首都ナイロビで開かれた国連環境計画（UNEP）で採択された「ナイロビ宣言」によって、地球的規模の環境破壊があらためてクローズアップされ、発展途上国の貧困と先進工業国の浪費が指摘されている。

木材需要の7割を外材に頼る日本は、世界最大の木材輸入国として、東南アジアの熱帯林破壊に手を貸してきた。現地では、それに伴うさまざまな問題も生じている。いま、東南アジアと日本の貿易、木材の輸出入、東南アジアの森林伐採とその影響、それへの対策などを具体的に調べ、日本と東南アジアの関係を“木材（森林）”を通して考えることは重要なことと思われる。

II 東南アジアと日本の貿易

東南アジアとは、ベトナム、ラオス、カンボジアのインドシナ3国、タイ、ビルマ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピンなどの諸国である。これらの国々は、タイをのぞいて、17世紀以来欧米の植民地となり、モノカルチャー経済を強制された。とくに19世紀以降は在来工業は衰退し、先進国の市場になるとともに原料供給地となった。

東南アジア諸国は、第二次世界大戦後、つぎつぎに新しい独立国となった。インドシナ3国は

社会主義化し、ビルマをのぞいた5カ国は地域協力体としてA S E A N（東南アジア諸国連合）を設立している。社会主義国をのぞいたこれらの諸国は、経済的には遠い旧宗主国から離れ、太平洋地域との関係を強めている。東南アジア諸国では日本が最大の貿易相手国となっている。その品目構成をみると、東南アジアの資源輸出、製品輸入という垂直的貿易関係になっている。このなかで、木材はかなり重要な輸出品目になっている。

Ⅲ 東南アジアと日本の木材輸入

わが国の木材需要は、住宅建設や紙パルプ生産の増加とともに拡大し、過去20年間に約2倍の規模になっている。この間、約9割あった木材自給率は急激に低下して5割を割り、1980年には約7割を外材に依存するに至った。現在では日本は世界一の木材輸入国であり、とくに原木(丸太)ではその過半を占めている。

日本の外材輸入先をみると、その約半分はインドネシア、マレーシア、フィリピンなどの東南アジアが占めている。これらの国から輸入しているのは、フタバガキ科のラワン材であるが、これら3国で時代により興味深い変化がみられる。かつてラワン材のシェアの大半を占めていたフィリピンは、森林の枯渇化から資源保護と現地産業育成のため、原木での輸出規制を強化した結果、現在では10%を割っている。一方、急速に増えたインドネシアでは、1980年5月、原木輸出から加工材輸出へ施策を転換し、1985年の原木全面禁止を打ち出している。このように木材にも、資源ナショナリズムの立場から資源を保護する動きがでてきた。この結果、現在は7割がマレーシアのサバ、サラワク両州からのものになっている。インドネシアからの原木輸入も東カリマンタンからのものが多いので、わが国は現在、ラワン材のほとんどをボルネオ島からの供給にたよっている。

このように、東南アジアの諸国は、資源保護と合板などの加工材産業の育成に歩みだしている。

Ⅳ 東南アジアの森林の伐採とその影響

東南アジアで産する樹木は、俗にラワンといわれるフタバガキ科の樹種で、日本では合板、階段、窓枠に使用されている。それに、タイ、ビルマで主に生産されるシタン、コクタンなどの貴重材がある。このなかで多く伐採されているのはラワン材である。

現在、アジアの森林は1日5,000haが消滅しているという。年間ほぼ四国の面積に相当する180万haが消えている。この状態が続けば、2,000年には3,600万haの森林が消滅すると予測されている。

森林消滅を促進している要因として次のことが考えられる。(1)先進国出資企業による木材の大量切り出し、(2)焼畑農業による伐採・火入れ、(3)煮炊きのための薪炭材、(4)食糧増産のための農園化、(5)失火や野火による消失があげられる。

タイ、ビルマの焼畑で栽培されているのは、日本への飼料用トウモロコシであるという。ここでも日本との関連がでている。ネパール、インドでは薪炭採集による状態は深刻であるが、このよう

表．おもな国の商品別貿易

タイの貿易

(1979年) (単位 百万ドル)

輸 出	輸 入
米 ……768	機 械 類…1,371
生 ゴ ム…605	原 油…1,147
野 菜…575	鉄 鋼…508
す ず…453	石 油 製 品…431
魚 介 類…312	自 動 車…400
とうもろこし ……273	有 機 薬 品…245
砂 糖…234	プラスチック…217
計 × ……5,297	計 × ……7,157

フィリピンの貿易

(1979年) (単位 百万ドル)

輸 出	輸 入
やし 油…743	機 械 類…1,240
銅 鉱…441	原 油…1,168
木 材…348	鉄 鋼…473
果 実…318	自 動 車…333
衣 類…217	石 油 製 品…261
砂 糖…212	有 機 薬 品…184
木 製 品…188	航 空 機…147
計 × ……4,601	計 × ……6,613

マレーシアの貿易

(1978年) (単位 百万ドル)

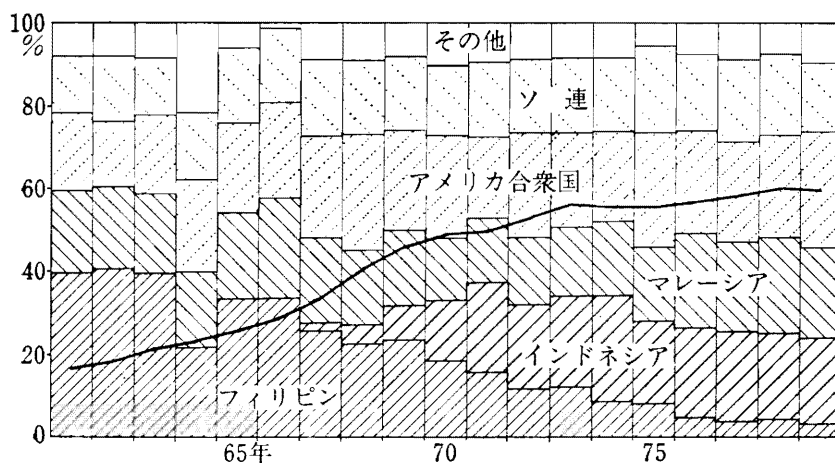
輸 出	輸 入
生 ゴ ム…1,558	機 械 類…1,558
木 材…1,094	自 動 車…515
原 油…972	原 油…401
す ず…875	鉄 鋼…302
パ ー ム 油…791	石 油 製 品…223
機 械 類…728	金 属 製 品…151
木 製 品…166	米 ……139
計 × ……7,387	計 × ……5,889

インドネシアの貿易

(1980年) (単位 百万ドル)

輸 出	輸 入
原 油…11,671	機 械 類…2,604
石 油 ガ ス…2,881	原 油…1,052
木 材…1,816	鉄 鋼…967
石 油 製 品…1,187	自 動 車…891
生 ゴ ム…1,174	石 油 製 品…692
コ ー ヒ ー 豆…656	米 ……690
す ず…423	有 機 薬 品…349
計 × ……21,909	計 × ……10,834

(日本国勢図会 1983年版による)



図．わが国の木材輸入先の推移と外材依存率

(松尾達也：森林資源の将来像，地理 27-8 による)

な事態は、フィリピンのヴィサヤ諸島（ルソン島とミンダナオ島の間にある多数の島）、タイ、インドネシアのジャワ島でも生じている。

マレーシアの林地では農園化がすすみ、アブラヤシやココアが栽培されることが多いが、これにより荒廃化していくことが懸念される。タイなどのモンスーン林地帯では、失火や野火などで各所に煙があがる。これにより1年生の稚樹が死滅し、火に強い成長樹だけが残る。焼畑や野火などによる森林燃焼の火は人工衛星からも見えるそうである。

以上、東南アジアにおける森林伐採の状態をみてきたがその影響は小さくない。(1) 山崩れや洪水の災害、(2) 土地の草地化、砂漠化、(3) 動植物の種の減少、消滅、(4) 大気中の炭酸ガスの増加などがおこる。地域はもとより、地球全体の環境にも悪い影響を及ぼしてくることも考えなければならない。

V ・ む す び

熱帯林の枯渇化をくい止めるためには、(1) 植林の励行、(2) 伐採の縮小が考えられねばならない。

各国とも、伐採後には植林を義務づけている。しかし、植林はうまくいっていない。ラワン木は発芽能力が小さく、生長が遅く、人工更新の面で課題がある。ユーカリ、マツ、アカシヤ、チークを植林しているが、二次林が形成されるだけである。しかし、成功のきざしもある。

東南アジアの国々では、木材は貴重な外貨獲得源であり、日本などの需要とあいまって乱伐ともいえる開発を余儀なくされてきた。最近、資源の保護と国内企業の育成から原木輸出規制の政策がとられてきているので、日本の企業の多くは撤退した。現地に残った日系企業も現地資本と合併し、現地の人々を多く雇うようになってきている。

東南アジアの森林資源は、わが国の木材工業のためにも大切である。「森食い虫」といわれないためにも、森林造成のための林業技術協力の推進、未利用樹の利用技術の研究開発をし、これらの地域の林業の健全な発展、経済生活の向上、国土の保全に日本も貢献していく必要がある。また、全地球的には「緑の地球防衛基金」を充実させていくことが重要である。

【参 考 文 献】

- 西暦2,000年の地球 (1), (2) 家の光協会
- 松尾達也：森林資源の将来像 地理, 27-8
- 篠原武夫：枯渇化する東南アジアの森林資源 地理, 28-6
- 和田盛二：森林、林業の取扱い 地理, 28-7
- 熱帯雨林 PANDAシリーズ
- 日本国勢図会（1983年版） 国勢社
- 危うい！ 緑の地球 朝日新聞 1982年4月～5月